

今求められる グランミューズ指導 とは？

年齢層別に読み解く指導のポイント

一昔前、子供の習い事の代名詞であった「ピアノ」、

そのピアノに趣味や余暇、あるいは自己表現のひとつとして取り組む大人が増えてきている。

「学ぶ」意識の高い大人たちの増加に因るものだろう。

当協会でも大人たちの演奏のステージは、「グランミューズ部門」（元アミューズ部門）として、ピティナ・ピアノコンペティション、ピティナ・ピアノステップにも登場し、彼らの演奏は、子供の演奏とはまた違った深い印象を私たちに与えている。

今回は、このグランミューズ層のピアノ指導について考える。大人たちのピアノ指導には、子供の指導とは異なったポイントがあるはずだ。どのような指導が求められ、そのために私たちピアノ指導者たちは何を提供していくことができるだろうか？

また一口にグランミューズと言っても、その年代や専門志向の高さによって、ピアノに取り組む目的は様々である。

今回、事前にアンケート調査を行い、コンペ、ステップともにグランミューズ部門に生徒を参加させている 200 名強の先生方から回答をいただいた。その調査結果の分析とともにいくつかのケースを紹介し、グランミューズ指導について考察したい。

Interview

秋山徹也先生×金子一郎さん

“本物”を追求する グランミューズ

2005年ピティナ・ピアノコンペティションソロ特級部門で見事グランプリを受賞された金子一郎さん。金子一郎さんの本業は高校で数学を教える教師。いわばグランミューズの象徴のような存在である金子一郎さんは、現在秋山徹也先生に指導を受けている。金子さんにとって、「レッスンを受ける」ことはどのような意味をもつのか？秋山先生の考えるグランミューズ指導とは？お二人に対談していただいた。

自分の作品分析が正しいか、 その確証を得る

—— 秋山先生に習い始めたのはいつ、どのようなきっかけだったのでしょうか？

金子一郎さん（以下金子） 1年半前くらいです。秋山先生の教室に通っている友人の紹介です。レッスン内容を聞いて、自分の求めるレッスンをしてくださる先生だと感じ、習い始めました。レッスンの目的は2つです。作品の本質についての自分の分析が理論的にも芸術的にも正しいかどうかの確証を得たいということ。それを音にどの様に反映させるかという部分で、自分の感覚と、客観的に第三者が聴いた際にそれが反映されているか、或いはもっと効果的に反映させる方法は無いのか、そういった事を教わりたいということ。それはもう僕のピアノレッスンを受ける



最大の目的なのです。作品を演奏する際には、機械的な練習ではなく、作品としての音楽的な意味を知ることが最も重要であって、その音楽的な表現を確立出来れば、後はついてくると僕は思っています。ですから、そのコアの部分をもっと確実なものにするために秋山先生に教わる必要があったのです。



秋山徹也先生

東京芸大講師、ピティナ文京アナリーゼ
ステーション代表 当協会正会員



金子一郎さん

早稲田中・高等学校数学科教諭、フェスティバル
実行委員、2005年ソロ部門特級グランプリ、当
協会正会員



究極の姿を示す

—— 秋山先生は、グランミューズ指導についてどのよう
うにお考えですか？

秋山徹也先生（以下秋山） 僕の場合、振り返ってみると、
グランミューズ指導についての考え方は以前と変わりました。以前は指導力が無かったせいもあるのですが、大人の方が「とにかくピアノを弾きたい、この様な曲を弾きたい」と曲を持ってきたとき、まあ、音を間違えないでおおむね形になっていればよいかなあ、くらいに結構甘く考えていたのですね。でもそうすると結局、メジャーな曲が弾ければそれでよしとする様な考えになってしまい、より深く本質を追及しようとする目的を持ってないのでしょう。やがて飽きられてしまい、長く続きませんでした。だから今は、どのような方であっても、もっと音楽の本質に迫り、曲の構造・和声などからいちいち理由づけしながら「この曲ならこの様に弾けたら良い」という究極の姿を、一応示して見ることにしています。まだこれからだなあという方には、実際に音で表現してみせたりして、具体的なイメージも養いながら。技術力は人によっていろいろですから、示したところでそれを実現できるとは限りません。でも究極の姿を示しておけば、それを実現しようと本気に努力されることが多いですね、グランミューズ層の場合。むしろ本人がよりアイデアを膨らまして、より物凄い事をしてくるくらいです。そうやってゆくうちに、技術力も上がり、突然上手くなる事もあります。とにかく徹底してやり出すと、本人が主体的に止まらない位の勢いで突っ込んで来るといことです。そうなれば、後はバランスとか整合性とかの相談役に回ることになります。

金子 僕もそうですが、基本的に皆さん本物を求めていますよね。

秋山 そう。グランミューズの人は本質を深く知ろうとしている傾向が間違いなくあります。追求が半端でないと感じます。ですからそれに対応しきるだけの指導力が必要です。全てに妥協しないで理由をつけて本質を全部伝

えなくてはならないでしょう。その上で本人の解釈方針に沿って、あるいはトータルのバランスからよく考えて、それが良いのか悪いのかを色々と個別に考えながら進めます。いわば徹底さと柔軟性が必要ですね。そうしないと飽きられて辞めていってしまうでしょう。

作品の時代によって変わる 音楽的要素のバランス

—— 金子さんは秋山先生に習い始めて気づかされたこと、一番影響の大きかったことは何ですか？

金子 作曲家や作品の生まれた時代によって、意識する音楽的要素のバランスが変わるという事です。それが収穫として一番大きかったと思います。例えば、ドビュッシーは、調性や、和声の細かい変化とか、リズムの複雑さが特徴です。対して、ベートーヴェンの作品は、調性や和音はほとんど限定されていますが、モチーフが全体を有機的にまとめ、緊張と弛緩の表現される大きな構造体としてとらえることが重要です。バッハになると、対位法的なものが強くなるなど、時代や作曲家によって、大分頭の中でバランスを変えなければいけないという事を教わったのが一番大きいと思います。後は響きのバランスですね。響きのバランスが曲の形態によって変わるということ、具体的なサンプルが色々とあって、それも大変勉強になるし、そして何よりも汎用性があるのですよ。

解釈を一方的に押し付けない

—— お二人のレッスンを見学させていただきましたが、かなり特徴的なレッスンをされていますね。曲の解釈についてお互いの意見を出してディスカッションし合うようなレッスンのようですが？

秋山 金子さんの場合だと、もともと自分で徹底的に分



▲金子一朗さんの楽譜。膨大な量のアナリゼが書き込まれている。

析して来られるので、最初から相談役です。「自分だったらこうするよ」と意見することもあります。それとは全然違った形で演奏をしている事が多いのですよ（と金子さんの方を指して）、実際問題（笑）。いや、それはその人の個性だものね。やはり、その人の持って生まれた個性とか、音色の出し方とか、考え方の違いから来る訳でしょう。要は、その人の考え方その人の立場で考えてみて、この解釈は成り立つか、そしてその解釈のとおり表現できているか、という事を考えてあげれば、もうそれで良いのですよ。

金子 僕が逆に聞いたりもするのですよ、そうすると「いや僕の考えを聞いても仕方が無いから」と言って逃げるのですよ。（笑）

秋山 それはそうですよ。先入観を植え付けてしまったら教師のコピーになってしまいますからね。小さい子供相手でも、ある程度出来ている子供だと、作品の分析もさせるし、それに基づいて自分で考えさせてアイデアを出させて弾かせます。導入期ならともかく、いつまでも「ここはこうするものだ」と押しつけ続けていたら伸びないですよ、それはしてはいけません。

金子 寧ろ、僕の方が先生に一方的に解釈を押し付けて

いるかも知れません(笑)「僕はこう考えているのですけれども」という様な。

秋山 それで良いのですよ。弾くのは金子さんですから。金子さんのレベルだと、基本的には本人の解釈に基づいて、その解釈が妥当であるかどうか、思った通りに音が出ているかどうかをチェックして上げれば良い訳です。自分とは解釈が大きく異なっている、可能な解釈ならばもちろんそのままです。「いや、これはどう考えてもおかしい」という時には言いますよ。「整合性に少し無理があるよ」とか「音の上げ方のカーブが不自然かも」というように。また、さらなる隠れた表現の可能性がある時も言います。「この隠れたラインをもっと表に出すとよいかも」とか「この和音の○○な色彩感をより一層表に出してもよいかも」などと。

遠回りなようで最良の方法 ソルフェージュ能力を身につける

——— 最後に、金子さんからグランミュージズの方々へのメッセージをお願いします。

金子 グランミュージズの方が悩むこと、それはピアノに対する思いに比して、仕事や家庭などでピアノに向かう時間が少ないということでしょう。その限られた時間の中で、ピアノの演奏を向上させる最適な方法が、合理的な技術の習得、そして、ソルフェージュ能力だと思っています。ソルフェージュの定義はまちまちですが、ぼくはリズムや音程などを正しくとらえることだけではなく、和声や楽式や対位法を習得することなど、非常に広義にとらえています。そして、僕は、ソルフェージュ能力が高まれば、それによって音楽を認識する能力も高まるので、それを表現しようとして技術が正しい方法で身についてくると思っています。しかも、これの大きなメリットは、遠回りであるように、実は、一生を通じて短い時間で作品を確実に暗譜して仕上げる最良の方法だということです。一人でじっく

り考えて勉強することも大切ですが、やはり、その道に長けた先生に教わることで効率的に勉強できることもあると思います。皆さんで、自分に最適な方法を見つけられると良いのではないのでしょうか。

1日単位では我々グランミュージズの人達に与えられた時間は少ないですが、継続さえすれば、蓄積する時間は膨大なものになります。今はできなくてもいつかできるようになりたい、そういう気持ちを常に持ちたいものです。

レッスンにお邪魔しました

今回のレッスン曲目は、ドビュッシーの作品「喜びの島」「ベルガマスク組曲」など。8月11日に行われる金子一朗さんのリサイタル(詳細はp.56)に向けての初回のレッスンだそう。お二人のレッスンは特徴的。ピアノの前に二人並ぶのではなく、金子さんの演奏を少し離れたところから秋山先生がご覧になり、コメントしていくというスタイル。作品の解釈に二人で意見を出し合い、イメージをかためながら、楽譜の意味を解明していく。



2つの年齢層で異なる グランミューズ指導の実態

「憧れのあの曲を弾きたい」「小さい頃投げ出してしまったピアノにもう一度チャレンジしたい」「独学でピアノをやっているが、コンクールに挑戦してみたいからちゃんと先生のレッスンにつこう」・・・大人がピアノを弾く目的は様々だ。「何か新しい習い事をはじめたい、ピアノなんてどうだろう・・・?」「ボケ防止に指を動かすピアノは良いらしい」そんな動機だってあるはずだ。目的やきっかけは様々だが、共通して言えることは、大人は自らの意思で「ピアノを弾く」ことを選び、それを教えてくれる教室を自らの基準で選んでいるということだ。

目的・趣向は様々だと述べたが、それを年代によって分類し、検証してみたい。20代～40代の学生・社会人の年代と50代以上実年齢の年代に分類してみた。それぞれの年齢層に同じ質問を投げかけ、その回答の結果から2つの年齢層の傾向をさぐってみたい。

グラフ1

グルーブレッスンの多い実年齢層



グラフ1からわかるように、20代～40代の学生・社会人層（以下、学生・社会人層とする）の生徒数は、20名

以上が11%に対して50代以上実年齢層（以下、実年齢層とする）では22%を超える。これは、実年齢層のレッスンが一度に複数の生徒を指導するグルーブレッスンの形態をとっている指導者が多いことを示唆しているのではないと思われる。

グラフ2

両年齢層ともクラシックが一番人気、ポピュラーもそれに続いて

ジャンルについては、やはりクラシックが堂々の一番人気。特に学生・社会人層では66%を占める。中でもやはりショパン、リスト、ラフマニノフなどロマン派作品が人気だ。ポピュラーも学生・社会人層で25%、実年齢層で33%とそれに続く。ポピュラーでは、学生・社会人層にはディズニーや久石譲作曲のジブリ作品が人気。実年齢層では、クラシカルな映画音楽（ムーン・リバー、ゴッドファーザー、ある愛の詩など）を選びたい生徒が多い

ようだ。ジャズのレッスンを望む生徒たちも、まだ少数ながらいるようだ。幅広いジャンルに対応できる指導も問われることになりそうだ。

グラフ3

演奏技術習得を目指す学生・社会人層、ピアノ仲間をつくりたい実年齢層

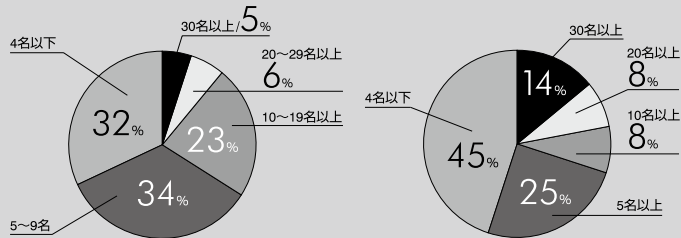
ピアノレッスンに求めるものは何か？—— グラフ3を見ていただきたい。両年齢層とも「弾きたい曲が弾けるようになること」が堂々の第一位になっており、偶然にも全体の36%と同じ割合を占める。対して、大きな違いが出たのが、学生・社会人層では、「ピアノの演奏技術があがること」が27%を占めるのに対し実年齢層では15%、「教室を通じたピアノ仲間を作ること」が実年齢層では23%を占めるのに対して、学生・社会人層では7%という結果となった。学生・社会人層では、純粋な音楽の追及がテーマとなっている。実年齢層では、ピアノを媒介とした「仲間作り」、「ピアノを通して社会とつながっていくこと」がテーマとなっていることがわかる。この点からも実年齢層でグルーブレッスンが取り入れられていることにうなずける結果となっている。



20代～40代の
学生・社会人層50代以上の
実年層

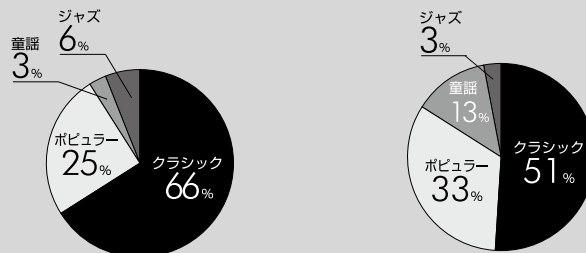
グラフ1

Q1: 生徒の人数について教えてください



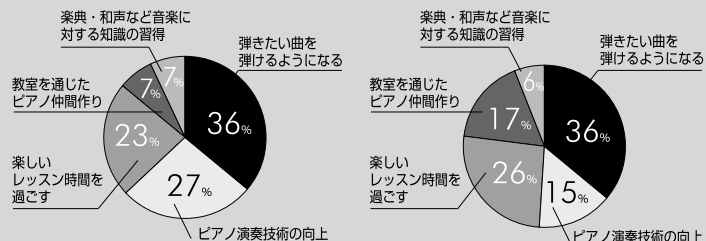
グラフ2

Q2: どのジャンルの作品が人気がありますか？



グラフ3

Q3: ピアノレッスンに求めるものは何ですか？



データには現れないが、アンケート調査をして筆者が感じることは、学生・社会人層には、子どもの頃ピアノをやっていたピアノ歴がある方が多いということだ。小さい頃からそのまま継続的にピアノを続けている方、一度進学や就職などの事情によりブランクがあり、その後もう一度と再開した方などピアノ歴は様々ではあるが、一度以上のピアノ歴を持つ方ということだ。それだけにピアノに対するモチベーションが高いことは想像できるが、ある程度の基礎力が身についている一方で、基本のやり直しが必要な場合もある。また勉強や仕事、家庭という本業を抱える中での「練習時間の確保」は、普遍的なテーマであろう。実年層では、ピアノの初心者がそれなりに多いようだ。「これからピアノをはじめよう」と基礎から学ぶことに奮闘中だ。彼らの場合は、年齢に伴う手や指の問題を抱えつつ、仲間とともにステージ経験を重ねながらピアノに取り組んでいるようである。

次ページからは、学生・社会人層と実年層とそれぞれについてのケーススタディとして、事例を紹介していきたい。

[学生・社会人層ケーススタディ①]

大人だってまだまだ伸びる 「いい音楽」への追求に妥協なし

桐朋女子中・高校で教鞭をとるかたわら、多くのグランミューズの生徒を教えておられる相澤聖子先生。一口にグランミューズと言っても、音楽を専門に勉強している学生、一般大学の大学生、仕事をバリバリこなす社会人、主婦など様々な生活スタイルを持っている。その共通点は、皆ピアノに対して真剣勝負であるということ。生徒さんの多くが毎年コンペに参加。年齢もY, A, Bカテゴリーまで幅広い。昨年は、その半数以上の生徒が予選を通過し、全国決勝大会でも2名出場など、グランミューズ層の指導に圧倒的な信頼と実績を持つ相澤先生。今回は、昨年グランミューズ部門A1カテゴリーでグランプリを受賞した太田健介さんとともに相澤先生のレッスンの極意にせまる。



相澤聖子先生 (写真左)

桐朋女子中・高等学校講師、当協会正会員、PTNA 青山ステーション代表

太田健介さん (写真右)

東京大学大学院総合文化研究科博士課程2年。研究テーマは、超伝導体の応用。相澤聖子先生には8歳から指導を受け、昨年グランミューズ部門A1カテゴリーでグランプリを受賞。趣味はサッカー。

—— 太田さんは、相澤先生に習って18年ということですが、相澤先生のレッスンはどのようなレッスンですか？

太田健介さん (以下太田) 相澤先生には、小学生の頃から通っていますが、以前と変わらずレッスンは真剣そのものです。音楽専門に進む生徒が大半の中でその道を選ばなかった僕は異端児的存在なのですが、相澤先生は区別なく教えてくれます。先生のレッスンの前後では、自分では感じる曲の「おもしろ味」が全然違うことを実感しています。

相澤聖子先生 (以下相澤) 彼の場合は、小さい頃からの積み重ねがあるので、忙しく練習の時間が取れなくなった現在でも何とか能率よく短時間で弾いてきます。私のレッスンでは(料理に例えれば)その素材を生かしつつ、調理法や隠し味などを伝授していきます。

—— 長く太田さんを見て来られた先生にとって、太田さんはどのような生徒さんですか？

相澤 長い付き合いですが、「一生懸命、いい音楽をやりたい」という純粋な気持ちがいつも伝わってくる子でした。いい意味で気負いのない自然体であることが彼の良いところですね。お互い信頼しあっていることを実感しています。

—— 太田さんにとって、ピアノは生活の中でどのような位置を占めますか？

太田 学校の方も忙しく、毎日練習することは難しいのですが、平日の朝8:00から30分~1時間程度練習します。基本的にピアノは、リフレッシュの時間です。やりたくないことはやらない性格なので(笑) 僕にとっては、細かい練習も苦ではないのだと思います。ピアノがうまく行っているときは、本業(大学院での研究)もうまく行っている

ることが多い比例の関係のようです。おそらくピアノと本業の切り替えがうまく行っていて、集中力がある時期だということなのでしょう。ピアノはライフワークとして、一生続けていきたいと思っています。いつかコンチェルトをするのが夢ですね。



インタビューは、終始笑いが絶えず、和やかな雰囲気が進みました。ですがいったんピアノの前に座ると、がらりと「ピアノモード」に。多くのグランミュージズの生徒さんを教える相澤先生の考えるグランミュージズ指導の特徴とは？今までの経験談を交えてお聞きしました。

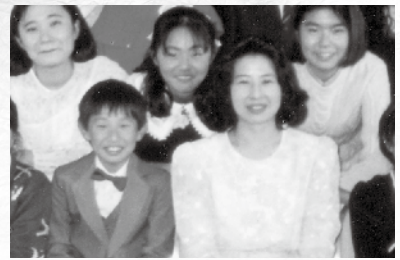
—— グランミュージズの生徒さんの特徴とはどのようなところでしょうか？

相澤 まず生徒は、各個人で大いに異なるということです。生徒の年齢はもちろんのこと、今までのピアノ歴、この教室でのレッスン歴にもよります。また生徒側のピアノへの志向、「基礎から習得し、着実に積み上げていきたい」のか、「ある曲がすぐ弾きたい」のか、「コンクールに挑戦したい」のか、なども個人個人異なるので、それを汲み取ることでですね。

年代の違いということは大きいようで、そのライフスタイルが違うことから、音楽以外のことも含めて考え方が大きく違うことを感じます。私の教室では、生徒どうしの交流の場も多く設けていますが、そういった機会に如実に感じます。20代の学生は勉強（あるいはピアノ）が中心、

30代の方はまさに働き盛り、厳しい社会の中にある緊張感が漂ってきます。40代の方は、多少落ち着いた

中でピアノをやろうと余裕を持ってピアノに取り組んでいるようです。



▲小学校4年生時の太田さん。相澤先生のクリスマス会で。

—— グランミュージズ指導について先生のお考えをお聞かせください。

相澤 グランミュージズの方々にはそれぞれの背後に仕事、家庭などピアノ以外の事情がありますので、こちらとしてもそれを頭の隅に置きながらレッスンを進めていきます。生徒が長く勉強を続けられるよう、こちらでもレッスン時間など調整する気持ちを持つことです。

しかし、ピアノの前に座ったら純粋に先生と生徒。性別、年齢、わけ隔てなく、一律音楽的指導をすることです。「大人なんだからこのくらいいいんじゃない」という教え方はしていません。「今できるテクニックと表現を身につけましょう」と生徒ができる最大限のことを教えます。そこは妥協しません。



長期休暇を利用して福岡から相澤先生のレッスンに

現在、福岡県在住、九州歯科大学3年の新居由紀さん。勉強に忙しい毎日だが、「ピアノを本格的に長く続けたい」との思いから、1年前より長期休暇を利用して千葉の実家に帰省した際に東京の相澤先生のレッスン室に通っている。普段は、毎日必ず1回はピアノを触ることを自らに課し、年4回ほどの長期休暇の間に短期集中型で相澤先生の指導を受ける。相澤先生のレッスンを受けることで一番自分に変化があったのは、「全身を使って弾く」ことができるようになったことだ。相澤先生は常にホールでの演奏、本番を意識したレッスンをしてくださる。新居さんにとってピアノとは？

と質問したところ「毎日の食事などと同じ日常生活の一部」とのこと。「大学生生活のペースもつかめてきたので、落ち着いてピアノに取り組みたい。生涯を通してレベルアップしていきたい」と静かながら、強い意思を感じさせる口調で語ってくれた。

同じ「先生」業の先輩として

千葉県木更津市在住の守麗子先生。守先生の教室には長くレッスンを続けている生徒が多い。3歳から習い始めて20年以上の方、また30年以上続けてレッスンを受けている40代の方もいる。その娘さんも守先生のレッスンをを受けているなど、孫弟子も数名。音楽の道に進まなくても、別の職業に就いても、ピアノを継続し、さらにコンペティションで結果を残すなど意欲的にピアノに取り組む生徒も何名もいるという。今回はその中のお二人、御園奈美さん、金子智美さんにインタビューした。自然体で穏やかな雰囲気の守先生。そのピアノ指導の魅力とは？



守麗子先生 (写真中央)

元帝京大学、都立高等保育学院、明德短期大学講師、当協会正会員、ピティナ木更津連絡所代表

御園奈美さん (写真左)

現在、千葉県内の小学校教諭。現在、1年生の担任をつとめる。

金子智美さん (写真右)

現在、千葉県内の保育園に勤める保育士。

—— お二人はそれぞれ仕事をお持ちで、お忙しい毎日を送っていらっしゃると思います。その中でコンペティションに出られるなど、そのモチベーションはどこから沸いてくるのでしょうか？

御園さん (以下、御園) 以前はステージに立つことが苦手だった自分が、ステージの経験を積み重ねることにより、舞台にたつことが楽しくなった、といういい思い出があるんです。ここまで先生にできるようにしてもらったので、やめたくない、やめるのはもったいないという気持ちです。専門ではないですが、自分なりに高めていきたい意思があります。

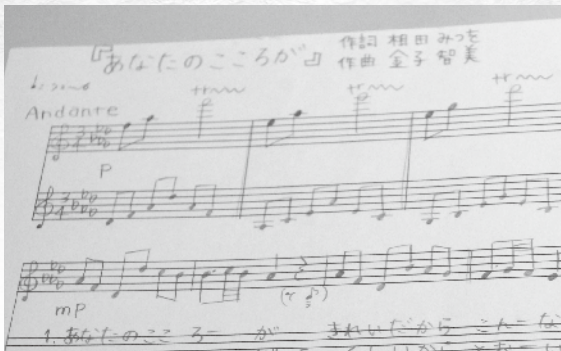
—— 守先生のレッスンはどのようなところが特徴でしょうか？ 続けているのはどのような魅力がありますか？

金子さん (以下、金子) 私は、ピアノが全然はかどらなかったこともあるんです。そういうときも話を聞いてくれ

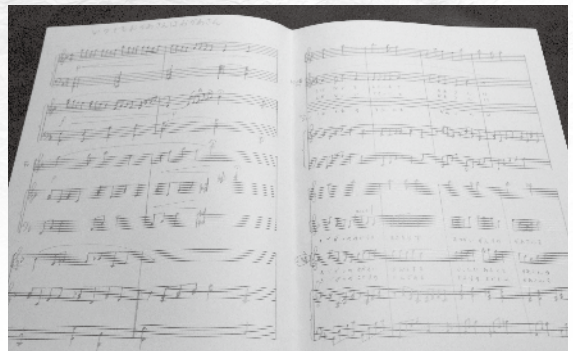
たり、相談にのってくれたり。パワーをくれる先生です。先生のレッスン室に来るとほっとします。またレッスンの時間だけでなく、一緒に演奏会に連れていってくれたり、ピティナのイベントの手伝いで呼んでくれたり、先生ご自身の魅力を感じます。

御園 まず、「思いつきがいい」「細部まで注意して弾けている」など私の良いところを見つけて伸ばしてくれるところだと思います。もうひとつは、私がぶつかった壁と一緒に乗り越えようとしてくれるところ。今、守先生から紹介してもらい、ポーランドの作曲家「ミロシュ・マギン」の作品を練習しています。なかなか解釈の難しい作品なのですが、楽譜を読み取る作業と一緒にああでもない、こうでもない先生と一緒に考えるレッスンがとても楽しいのです。

—— 小学校の先生、保育士というお二人ですが、ご自身にとって「ピアノ」が仕事に役立つことはありますか？



▲「あなたのこころが」(金子智美さんの作品)



▲「いつもおかあさんはおかあさん」(御園奈美さんの作品)

金子 私は保育士の仕事をしていますが、歌の伴奏に守先生のレッスンが大いに役立ちますね。守先生には演奏指導だけでなく、ソルフェージュや作曲なども教わっています。例えば、調を変えて伴奏をしたり、歌のメロディにすぐ伴奏をつけたり。

御園 私は小学校で1年生の担任をしているのですが、毎日クラスで歌を歌います。その伴奏などでしょうか。これからの私の夢なのですが、ピアノや音楽を今の小学校の仕事でもっともっと生かせればいいなと思っています。例えば生徒と一緒にクラスのテーマ曲を作ったり、学校内での音楽イベントを提案したりしたいと考えています。

—— お二人とも守先生と同じ「先生」という職業についていらっしゃると思いますが、同じ「先生」の先輩として、守先生の尊敬できるところはどこだと思いますか？

金子 一人一人の良いところを認め、常にこの子を伸ばし、可能性を広げてあげようという姿勢です。私が保育士として働いていくにあたって見習っていききたいところです。

御園 生徒一人一人を見抜く力を持っているところです。

—— 守先生はグランミュージズ指導についてどのようにお考えでしょうか？ お子さんの指導との違いはどこでしょうか？

守先生 大人と子どものレッスンは、やはり全然違うと思っています。レッスンを離れたところでも対等な関係で話ができることで、その信頼関係が自然とレッスンの中でも生きてきて良い効果を生み出していると思います。一般大学に通う生徒が、「今私の生活がこんなに充実しているのはピアノのおかげです」とステップの演奏前の紹介コメントを書いてくれた生徒がいたんです。嬉しい限りです。私は大人のレッスンの方が楽しいですね。

私の教室では、ソルフェージュに力を入れていて、小さいうちから歌の即興伴奏や作曲の分野も積極的にレッスンに取り入れています。二人もオリジナル曲を何曲もつくっていますよ。また小さい生徒のつくった曲を彼女たちが歌い、アンサンブルの手伝いをさせたりもします。



練習は効率的な「省エネ」で



コンペティション、ステップ併せて 23 回出場の大原尚子さん。仕事、家庭とともにお忙しい中、積極的にステージ経験を積み重ねている。普段は、サイレントグランドで夜中にピアノ練習をするという大原さん。今回も関西のグランミューズの祭典、“大阪城ステップ”に参加、この機会に師事している長岡秀美先生とともにインタビューした。

長岡秀美先生

大阪芸術大学元講師、庄栄アートミュージックスクール主宰、
茨木市音楽芸術家協会理事、当協会正会員

大原尚子さん

電機メーカー営業部勤務。社会人になってピアノを再開し 10 年。

——長岡先生のレッスンの特徴はどこでしょうか？

大原さん あるコンサートで声楽の伴奏をされている長岡先生にお目にかかったとき、その弾き姿と表現の美しさに憧れて先生にレッスンを受けるようになりました。先生のレッスン室もセンスが良くて、とても素敵なんです。先生のライフスタイルに憧れており、お手本にしたいという思いもあります。

レッスンについては、「歌う」ということ、フレーズ感などの表現について、手首の脱力方法について、など私が知りたかったことを教えてください。先生が具体的に横で弾きながら細かいテクニックなどを教えてくださいのめわかりやすいです。1 時間のレッスン時間がとても充実していると感じます。

——長岡先生は、十数名のグランミューズの生徒さんを



教えていらっしゃる
とお聞きしておりますが、グランミューズ指導で先生が重視されていることは何ですか？

▼長岡先生のレッスン室



長岡先生 グランミューズの生徒さんを見ていて感じることは、「自分の演奏における問題点を自分自身でわかっているのだけれど、ではそれを具体的にどのようにすればよいのかその解決法がわからない」という方が多いということです。グランミューズの方は、真面目な方が多いですし、練習時間もなかなか満足にとれないでしょうから、余計に苦しいと思いますよ。そこで私は真正面から取り組みすぎないこと、横やら斜めからいい意味で「くだける」ことを教えます。短時間でできる譜読みのコツなど「省エネ」で「効率的に」できるような練習法ですね。グランミューズは、個人個人で思いも個性も違うというのがやはり前提にありますので型にははめず、生徒と一緒に曲をつくるという意識です。

〔相澤先生門下グランミュージズにインタビュー〕

練習時間はどう確保してる? 今後のピアノの目標は?



相澤先生は、同年代の生徒を集めてしばしばグループレッスンをを行う。今回は、30代から40代のグランミュージズの生徒のグループレッスンにお邪魔してインタビュー。相澤先生ご自身が代表をつとめる青山ステップに参加、見学したことが相澤先生のピアノ教室入門のきっかけとなった方が多い。中には、ピティナホームページで紹介された「レッスン室拝見」のコーナーでの先生のレッスンぶりに惹かれ入門した方もいる。(インタビューはカワイ表参道にて)

◀相澤先生を囲んで。左から順に牧野元子さん、川瀬朋子さん、高橋良典さん、三好美穂さん、渡辺素子さん、富田和江さん(以下敬称略)

Q1 あなたのピアノ歴について教えてください。

- ◎小6までピアノを習い、社会人になってからポピュラーやジャズを独学で楽しんでいたが、限界を感じて相澤先生の教室に入門(川瀬)
- ◎音大卒業後、近所の子供を教えていた。自分ももう一度「弾く」ことにチャレンジしたいと奮起、レッスンに通うようになる。(渡辺)
- ◎高校卒業までピアノを習う。社会人になり、辛いときに聴く音楽はなぜかクラシック。クラシックを聴いたときの感動を、今度は自分が表現したいという思いにかられ、再びピアノを始める。(牧野)
- ◎数年前からピアノを再開。「もっとうまくなりたい」と相澤先生の教室に入門(富田)

Q2 お忙しいグランミュージズの方々。練習時間はどのように捻出していますか?

- ◎主婦なので昼間に家族のいない時間に一人で黙々と練習(三好・川瀬)
- ◎音大生の住む防音設備完備のマンションに住んでいるので、仕事から帰宅後、夜11時まで練習(高橋)
- ◎会社の昼休みを利用し近くのスタジオを借り、帰宅後は夜中12時から明け方まで練習。子供が小さく生活リズムができていないので時間の捻出が悩み。(牧野)
- ◎平日は朝7時から8時までの1時間、夕食を作るまでの1時間が練習時間(富田)

Q3 あなたのピアノに対するご家族や周囲の方の反応は?

- ◎息子は私にかまってほしいのか練習の邪魔ばかり・・・(三好)
- ◎まだ人に聴かせられる状態ではないので、一人こっそり練習します(高橋)
- ◎「ピアノがうまくいなくても落ち込まないでね」と娘が手紙つ

きでピアノのモチーフの入ったかばんをプレゼントしてくれた。娘の応援が嬉しい。(富田)

- ◎「毎日ピアノを弾いてピアノで挑戦をし続けている母を尊敬しています」と娘が作文に書いてくれたときは感動!(川瀬)

Q4 相澤先生のレッスンはどのようなレッスンですか?

- ◎弾く姿勢、音づくりなど入念なレッスン。実際に弾きながら教えてくれる(川瀬)
- ◎魔法にかかったような気分。自分の未知の世界を教えてくれる(三好)
- ◎自分のどんなピアノも最終的に受け止めてくれると感じさせてくれる。やる気にさせるレッスン(牧野)
- ◎私が表現したいことを教えながら、ひっぱりあげてくれる。(富田)

Q5 これからピアノで実現したい夢はありますか?

- ◎小さい頃、ピアノに憧れ学校の音楽室で練習したことを覚えていいる。自分のピアノがある今の環境はとても幸せ。これからひつても多くの作品を自分のものにしていきたい(三好)
- ◎アガリ症の私。普段の半分の力が出せるよう精神面を鍛えたい(斎藤)
- ◎ピアノは、自分の一生をかけて形にしていきたい趣味。とにかく真剣です!今は、レッスンを始めて1年だが、リストの「ラ・カンパネラ」が目標。(高橋)
- ◎今はまだ自分の頭の中でイメージする音と実際自分が奏でる音とのギャップに悩んでしまう。そろそろ一段階にあがって、ピアノを楽しんで弾けるようになりたい。(牧野)
- ◎私はピアノに対する思い入れが強すぎてしまうタイプ。心に余裕を持ってピアノに向かいつつレベルアップしたい(川瀬)

[実年層ケーススタディ①]

手も指もその方の個性 グループレッスンでみんな生き生き

埼玉県さいたま市は、ピティナ実年ピアノ教室の発祥の地。その影響で、今でも実年層のピアノ指導をされている先生方が多い。今回は、その流れをくんで多数の実年層の生徒さんのピアノ指導にあたっておられる大久保伊津美先生、大塚由美先生のお二人にインタビューした。経験の中から生まれたお二人の実年指導の工夫、その思いを紹介したい。



大塚由美先生

埼玉県蓮田市在住、ジュニアからグランムーズまで幅広い年齢層の生徒を指導、ステップを中心に精力的に活動。ピティナ指導者会員。



大久保伊津美先生

群馬県高崎市在住、自身の実年層のピアノ指導をきっかけに、2005年より地元高崎にてステップを開催。たかき echo ステーション代表。ピティナ正会員

グループレッスン長続きの秘訣

—— 大人の生徒さんは何名ほど、どのようなスタイルでレッスンされていますか？

大塚先生 (以下大塚) 7人グループがひとつ、4人グループがひとつの計11名を教えています。それぞれ7年、5年と続いているグループです。

大久保先生 (以下大久保) 私は、5～7人グループを6組、計33名の大人の生徒さんを教えています。長いグループだと今年で10年になります。ほか、個人レッスンとしても8名教えています。

—— グループレッスンが主体なのですね。お二人のグループとも長く続いているようですが、長続きの秘訣とは何でしょう？

大塚 生徒さんの中にはやはり、それぞれのご家庭の御都合があつて2、3ヶ月休まれる方もいます。それも柔軟に認めて再びレッスンに来やすい状態をつくること。あと、グループのメンバー構成として男性と女性がバランスよく混じっている方が長続きするようにも思いますね。

大久保 まず生徒さんご自身が元気であることが一番大事です。そのために、私の方で健康関連の新聞の記事の切り抜きを持ってきて話題にすることもあります。2つめに、やむなく欠席した方へのフォローですね。これは私よりも生徒さんどうして、欠席した後に電話をかけあったりしているようです。3つめに「いつも先に目標をもつ」ということですね。季節の歌などを早めに練習することから発表会やステップで披露することまで目標を設定しています。

ステージ演奏までの準備

—— 発表会やステップ、このように人前で演奏することを躊躇される方はいらっしゃるのではないかと思います。が、いかがですか？ステージに立ってもらうための言葉かけや実践法などありますか？

大塚 実は先日、4人グループの方の生徒さんがステップデビューしたところなんです。初めは皆さん躊躇してられましたが、まず一人一人、教室の前に置いたピアノで演奏する、またその曲はまだ習いたての曲を選ぶようにする



▲12手連弾の様子(大久保先生の発表会)

「みんな弾けないので」と気負いが少ない)、など段階を設定して徐々に人前で弾くことになっていただくようにしました。

大久保 私の教室では、ステップを日ごろのレッスンの一環として取り入れているため、人前で演奏することに自然に取り組んでいらっしゃる方が多いようです。それが定着しているので、日常のレッスンでの選曲が次のステップで弾くための曲だったり。皆さん、「ステージあつてのピアノ」と考えてくださっています。

「手」そのものに関心を持っていただく

——実年層の方だと、手や指、腕など硬くなって動きにくくなることも多いと思います。それについてはどのように対応されていますか？

大塚 私はそれをマイナス面としてとらえないように「あまり気にすることないですよ」とお伝えするようにしています。むしろその方に応じた曲選びの方に注力するようにしています。

大久保 私もそれに拘らないようにしています。どんな手も指もその方の個性ですから。自分の指の個性と仲良くつきあっていただけるように考えます。手を題材にした詩や俳句の紹介をしたり、女性ならおすすめのハンドクリームの話題などを持ち出したり、日ごろから「手」に関心をもっていただくようにお話をしています。

ピアノがもたらす副産物

——生徒さんがピアノを習うことで変化したことはありますか？

大塚 まず皆さんがだんだんおしゃれになられたことでしょうか。服の色がカラフルになって、レッスン室全体が明るい雰囲気になってきているように思います。私の教室では、グループレッソンのメンバーで、老人ホームに演奏に出かけるともしばしばです。「私たちの演奏を聴いてもらえるなんて」と生き生きとしている皆さんの姿を見ることは、私にとっても大きな喜びです。

大久保 生徒さんの話を伺っていると、ピアノを習っているお子さんやお孫さんとの共通の話題が増える、ご主人様からの曲のリクエストがあったりと、ご家族の応援を感じることが増えたようです。また大病をなさった方でも、「私にはピアノがあるから」とピアノが心身のリハビリになっていらっしゃるようです。

レッスンの教材は？

大塚先生の教室は「バスティン 大人のためのピアノ教本」を教材に使用。ステップや発表会では本人の希望に併せて選曲してもらう。バイエルを選ばれる方も多いそう。



大久保先生の教室では、教材として、「バスティン 大人のためのピアノ教本」（東音企画企画）ほか、「バスティン 中級レパートリー」（東音企画）、「おとなのハノン」（ドレミ楽譜出版社）を使用。発表会では自分の弾きたい曲を、ステップでは、課題曲は普段の教本から、自由曲は本人の希望で選曲するという。



戸沢睦子先生

運営委員、ステップ担当者連絡会委員長、組織委員、さいたま中央ステーション代表

ピアノの「お手伝い」をする姿勢で

ピティナ実年教室スタートから15年。実年教室の中核として、さいたま実年グループをここまで導いてこられた戸沢睦子先生にコメントをいただいた。

私は実年層の方のピアノレッスンをするとき、「人生の先輩にピアノを『指導する』のではなく、『弾けるようお手伝いする』」と思ってレッスンしています。そして、『お手伝いする』私たちも、一緒にステージにあがる機会を頻繁にもつ、など輝いていなくてはならないと思っています。

実年層の方々は、若い時のように手も指もコントロールしにくいことも多いわけですが、それに拘るのではなく「今新しく身につけたものを大切にしましょう」とお伝えしています。実年の方にとって、ピアノレッスンは「ピアノを弾く」ことだけでなく、「ピアノを通して仲間をつくる」「社会とつながりを持つ」という意味合いがあります。実年層のピアノレッスンの大切にしたいテーマですね。

[実年層ケーススタディ②]

50 名をまとめるリーダーシップ 生徒用のアレンジ譜は50曲以上！

斎藤美代子先生は宮崎県日向市在住。日向市文化連盟理事、さらには日向音楽レスナーの会会長を務めるなど、地元日向市の文化振興に尽力されている。その音楽振興活動の一端として、6年前から日向市が主催する「日向市大人のためのはじめてのピアノ講座」の講師をつとめている。3クラスのグループレッスンを受け持ち、生徒さんの年齢は50歳から86歳まで、計50名を越える。2時間のレッスンを月3～4回行う。使用楽器はピアノはもちろん、ピアノカ、キーボードなど。50名の生徒さんを率いる斎藤先生の考える実年層のピアノ指導とは？



斎藤美代子先生
当協会正会員

生徒が弾きたい、‘あのなつかしの歌’を 独自のアレンジ譜で

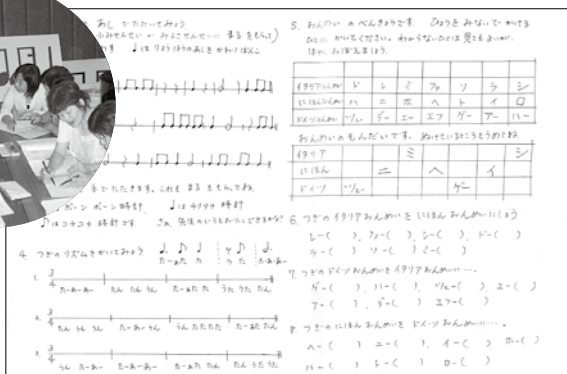
クラスの生徒は、はじめてピアノを習う方ばかり。実年層の生徒さんに人気のある曲は、「浜辺のうた」「水色のワルツ」「赤とんぼ」など昔なじんだなつかしの唱歌が多いという。両手で弾けて、無理のない楽譜を、と先生自らアレンジにあたっている。例えば、左手はドレミファの間におさまる音域で、音がとんだり指がくぐるような奏法が必要

なもの避ける、など。そのアレンジ譜は、実に50曲以上。「実年のピアノ指導をする場合、アレンジ力は必須ですね」と斎藤先生。またレッスン時間の半分は、楽典の勉強にもあてて、多方面から学べるようにしている。

ピアノカ、キーボード、トーンチャイム、 竹のドラム、なんでもアンサンブル！

2005年の日向ステップでは、生徒45人によるアンサンブルが披露された。楽器は、ピアノ、キーボード、ピアノカ、そしてなんと竹。竹はリズムを刻むドラムの役割だ。竹のリズム、ピアノカの迫力にアドバイザーの先生方も圧倒され、「演奏が楽しくてコメントを書く時間をもった。じっと見ていたかった」とおっしゃられたほどだという。

そのほか連弾、12手の2台ピアノなど様々なアンサン



▲斎藤先生の手作りの楽典の教材(左)、先生の手書きのアレンジ譜(右)

ブルを次々とあみだしていく斎藤先生。生徒さんたちは、ステージでの演奏に躊躇する方はほとんどいないという。「大きなステージは年2回、あとはステップに出ます。発表の場を多数用意して、場数を踏んでいくことでステージに慣れていくんです。そうするとソロで出て怖くない。また発表の場にご家族を呼ぶことも大いに効果があるんですよ。ご家族にピアノで挑戦している姿を見せることでご家族の協力を得やすくなる。ご家族が来やすいように、発表会の時間帯は昼と夜と両方に設定するようにしています。」と斎藤先生。



▲グルーブレッスンのワンシーン。斎藤先生(右)のお人柄が教室は、笑いの絶えない陽気な雰囲気だ。

まず先生が元気であること、 生徒が「楽しかった!」と感ずること

6年間続いているグルーブレッスンだが、その長く続く秘訣は「まず先生が元気であること」だという。活気のある先生でないと生徒はついてこないからだとか。あとは、レッスン時間の変更はしない、個人レッスンは引き受けないなど、ケジメをつけるところは貫くことだ。生徒たちが公平にレッスンをできるようにすることが最も重要なポイントだ。

大人を教えて改めてわかる、 幼児教育の大切さ

実年層の指導をするようになってから先生に変化はあったのだろうか？ 質問するなり、「我慢強くなりました(笑)」と先生。もうひとつは、逆説的に幼児教育の大切さ



▲昨年のクリスマスコンサートの様子。生き生きとした表情が印象的だ。

を身にしみてわかったという。「子供の頃でないと、絶対音は身につけません。やはりその年齢に応じて学べる必要があります。それがわかってから、幼児期の教育により力を入れるになりました」

内輪だけでなく外にひらけた発表の場を

これからの実年層の指導に求められることは何だろうか？ 先生のお考えを伺った。「生徒さんにより多くの発表の場を提供したいというのはもちろん、その発表の場が内輪のものでなく外にひらけた場である必要があると思っています。」と斎藤先生。固定されたメンバーの活動では、外の方が参加しにくくなるからだ。「例えば全国規模の発表の場があるといいですね。私はピアノを演奏するために東京に行く'なんて機会があると皆さん喜ばれるはずです。ピティナ実年層発表会を東京で開催していただくと、その近隣の娘や息子が来てくれて'家族愛'が生まれませんか？ そういう機会をひとつでも増やしていきたいですね。生徒さんの中には、レッスン日はご主人をデイスサービスに預けて『自分を取り戻すための貴重な時間』として来てくださる方もいます。せめてレッスン時間は笑顔になり、背筋も腰もぼして『楽しいなあ』と感じてもらえる時間にしたいと思っています。」

アンケートより グランミューズ指導の悩みと実践法

※アンケートよりたくさんの声が寄せられました。
こちらで一挙に紹介します。
ご協力くださった先生方、ありがとうございました。

♪ テクニック・読譜の指導法

- ◎ 大人は、長い曲になってくると、つまづきやミスが多くなるのでどのような指導をしたら良いのかが悩み。
- ◎ 年齢が上がると思体がかたくなるので、身体全体の使い方、背中、肩から腕、手と力を抜いて動かせるように若い人、子供とは異なる注意が必要。
- ◎ メソッドが確立していないので、まだまだ個人に合わせた手探り状態。子供の頃、弾いていて中断、また再開するケースについてのテクニックの指導が悩み。ついしまった弾き方のクセなど（子供に比べて）直すのが大変。本人自身もどかしく思っているのがわかるので、何とかしてあげたい。
- ◎ 左手の読譜力の低い方が多いので、その力をつける指導をしたい。
- ◎ 高齢の方には、音楽療法的要素を多く取り入れたレッスンをしていきたい。
- ◎ 大人の方のためのピアノの指導書が少ない。もっと個人個人の希望を叶えられるような幅広いテキストが欲しい。
- ◎ 楽典等の理解は早い指の動きや脱力などは、難しい。
- ◎ ジャズピアノを習いたいという方が増えてきているので、体系的にメソッドを考えてみたい。またアンサンブルをする機会も増やしていきたい。
- ◎ 柔軟体操は必須。
- ◎ 楽譜を目で追いながら弾けない（途中でパニックになる）ので、簡単な初見の練習を取り入れている。
- ◎ 体が硬いので、リラックス体操や曲に入る前にスケール&和音の練習をしている。
- ◎ 連弾や2台ピアノも織り込む。（子供より大人の方が反応、効果が感じられる）
- ◎ 弾けるところに満足して、弾けないところを練習しないので、「ワン・ツー・スリー」法（出来ないフレーズを2～4小節に分けて①右手②左手→続けて3回できたら③両手で合わせて3回行う）を取り入れている。



- ◎ 常に精神的満足感を得ることができるよう、部分を完成させていくレッスンを心がけている。
- ◎ 弾けるよう担った曲を忘れないようにレパートリー集などを作っている。
- ◎ 練習時間が限られているので暗譜を無理にさせない。
- ◎ ピアノが弾き易い「手」にいかにか近いものに持っていけるか、それが大きな課題。



- 肩こりや、腱鞘炎などにならぬように、サランラップの芯を利用した体操をお勧めする。テンポについては、メトロノームだけではなく、ウォーキングするときなどにも歌を歌いながら、一定の速さで足を出すようにするとか、音楽を聴く時に指揮をしながら聴く事で拍子感をつける等、アイデアを伝えている。
- ◎ 曲の解釈でもいくつか例をあげ、本人に選ばせるかたちをとる。
- ◎ 生徒が保育に関わる仕事をしているので、子供の歌の移調をしたり、伴奏をアレンジしたりする勉強をする。リズム遊びなどのアイデアと一緒に考える。

♪ 弾き易く聴き応えのある曲さがし

- ◎ やさしくかつ大人の興味に合う曲をさがすのが難しい。
- ◎ 実年の方々が好む曲で素敵なアレンジをされている楽譜を探したい。
- ◎ 連弾を取り入れたいが、大人のための連弾の曲（名曲のアレンジなど）が少ない。
- ◎ ポピュラーやスタンダードナンバーを御本人にあわせて編曲して差し上げたいし、コードネームを覚えて頂き、生徒さん自身のオリジナリティーを引き出したい。
- ◎ 技術的には難しくなくて、聴きごたえのあるアレンジの楽譜を探すのに苦労。
- ◎ 難しい所はすぐ書き変える、これ大切。



定期的なレッスンを困難な グランミュージズ

- ◎ レッスンにこられる状態が不定期だったり、計画的に作り上げて行くことが難しいのが悩み。
- ◎ 振り替えをすること。1ヶ月、2ヶ月の休みを認めてあげることで、臨機応変に対応する。
- ◎ 社会人・主婦の生徒は、仕事もあり、学生と違いチケット制にする。

大人の方が出やすい ステージのアレンジ

- ◎ 子供達と一緒に弾き合い会をすることで、双方に良い影響を与えているので、子供と大人と分けずに触れ合う機会を持たせたい。
- ◎ サロンコンサートや、ミニリサイタル等、おしゃれで、スマートな企画が喜ばれている。(帝国ホテルのミュージックルームを使ったサロンコンサートなど)

- ◎ 毎年、ニューイヤーランチタイムコンサートを行う。ピアノのあるレストランを貸切でランチを食べながら、1人1曲ずつ弾く。

大人どうしならではの コミュニケーション

- ◎ 気持ちのわりに手、指が思う様に動かないなど、自信を失いがち。自分自身をすぐ否定してしまうのでお世辞ではなくて励まして差し上げるのが難しい。
- ◎ レッスン中の会話を楽しみにしている方が多く、レッスン時間との兼ね合いが難しい。
- ◎ 雑談においては生徒に、ピアノ演奏についてはこちらがイニシアティブをとるようにしている。
- ◎ 私自身もピアノ以外の習い事をし、初心を忘れないように、生徒の立場を考えられるようにする。
- ◎ ピアノでも歌でも他の習い事でも、お話でも「何でも有り」の会を自宅で、お茶とお菓子とおしゃべりつきですることを計画中。
- ◎ 言葉遣いには最も気を使うようにしている。
- ◎ 人生の先輩ということを第一におき、指導者であればこそ、一步下がってその方を大切にお話を聞くことに徹している。指導者だからと頭ごなしに決め付ける話し方は絶対にしない。
- ◎ ステップ参加を中心に皆で仲良くなり、ランチを計画中。ヨーロッパなど、音楽ゆかりの地と一緒に旅行したい。



E p i l o g u e

あとがき

「2007年問題」という言葉がよく耳にされる昨今。経済面で持ち出される話題だが、それには私たちピアノ指導者も無関係ではない。「学ぶ」意識の高い大人が多いと言われる現代、新たにピアノを習い始める大人、子どもの頃、途中で投げ出してしまったピアノにもう一度向き合おうとする大人、様々な目的を持ってピアノに取り組む大人は増えてくるであろう。それは私たちにとってのチャンスであるし、この状況に対応できるよう今一度グランミュージズ指導について再考したいところである。

今回は、年齢層別に考察し、とにかく音楽に対して真剣勝負、本物を求める学生・社会人のグランミュージズ層と、音楽を通じて仲間をつくり、社会との接点を見出していく実年のグランミュージズ層という姿が見えた。個人個人に対するきめ細やかな対応が求められるだけに難しいグランミュージズ指導、模索中の先生方も多いと思うが、今回の特集での紹介が少しでもその一助になれば幸いである。そして、新たにレッスン室に吹き込まれる彼らの音楽への熱意を通じて、私たちも今一度音楽の魅力を再確認したいところである。